モンスターハンター　赤き翼

神月ラセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　赤き翼

【Ｎコード】
Ｎ１５９３Ｑ

【作者名】
神月ラセ

【あらすじ】
モンスターハンター　赤き翼
少年がハンターへと決意し……一歩脚を進めた、そこまでの物語。

『黒き龍を探す少年』

いつまでも忘れる事は無いだろう――。

森の中にひっそりと存在した小さな村、『神月』と呼ばれる一族が残した小さな村。

ハンターという存在は無く、されど存在し続ける事が出来たこの村は、一瞬で火の海と化した……黒い竜、そう、黒龍竜だ。鋭い爪に漆黒の鱗、森から唐突現れ龍は黒い火球を放ち家々を焼け尽くしていった。

皆が必死に逃げる、僕もその中で必死に逃げようとした……が、火球で燃えた家は易々と倒れ、その一つが子供の僕に向かって倒れて来る。避ける事なんて出来ない、ただ呆然と崩れ落ちてくるそれを眺めるしか――。

「い……や……」

一言だけ言葉を発する事が出来ようとも現実は変わらない、恐怖で動けずただ眼を瞑り死を待った。

「っっ！」

最悪な目覚め……そうとしかいい様が無い、また……またあの夢だ。森にあるひっそりとした村、それを焼く黒い龍、そして、僕に向かって崩れかけてくる家。

あれは実際にあった出来事だった、現実として僕はあの後、奇跡的に生き残って森林地帯を探索中だったハンターに救われている。

その後、ハンターに色々と尋ねたが、焼けた村も人の死体もどこにもなく、ただ焼け爛れた肌で僕が地面に倒れていたらしい。

「あれから、三年か……」

村は確かに存在した、僕は十二歳までその村で過ごした記憶を持っている。親も兄弟も親友も友人も知人も……全て覚えているんだ。

なのに一つだけ思い出す事が出来ないっ！　あの日、崩れてくる家の後の事を……普通なら気絶でもしたんじゃないかと思う、だけど助けられた僕の体には”焼き爛れた痕”しか無かったんだ、家の下敷きになったなら体が傷だらけになっていても可笑しくないのに、あの時、僕はどうにかして助かったんだ。

「絶対に見つけてみせる、あの日の記憶……あの村……そして――」

真っ黒で漆黒の闇に囚われた様なあの龍を――。

モンスターハンター　赤き翼

『黒き龍を探す少年』

三年という時は長かった、ハンターに助けられ僕は村で治療を余儀なくされた。そんな中で僕は一人、本を読みふけっていた、もしかしたらあの龍の事が判るんじゃないかと期待を寄せてともかく色んな本を読み続けていた。

だけど、まったく見つかる事は無かった。形が似ている龍の中では、雌龍、雄龍と呼ばれる二匹と黒龍と呼ばれる龍があったが書かれてる内容からしてもどうしてもあの黒い龍とは合わない。

雌龍はリオレイアと呼ばれる龍種であるが、色は緑であり、変異種でも黒は見つかっていない、雄龍もリオレウスと呼ばれ龍種であるも、色は赤であり、あの龍とはまったく違うと思う、唯一、同じ色の龍であった黒龍、ミラボレアス？　と称された龍がいたが大きさが通常の龍の数倍であるらしいから、あの家と同じぐらいの大きさであった黒い龍とは違う気がしてならない。

そんな中で、一つの言葉が眼に入ってくる。それは――古龍種だ、生態がはっきりとしていない上にどんな物がいるのかも良くわかっていない、判っている事は自然を操る事だ、今までの発見例では、火を纏う獅子、暴風を呼ぶ龍、姿の見えない生き物と言ったものがいる。

もしかしたら、あの龍もそうなんじゃないかと思う、あの龍も自然の一つだと思う、闇を身に纏っていた。

「ハンターナイフと……盾は邪魔だな、必要ない」

それらを眼にする方法はあまりにも少ない、だが、それでも会いたい、そんな中で僕はハンターという存在を思い出した。僕の村にいなかったそれは詳しく調べてみればモンスターを狩る存在であるらしい、先ほどの古龍種の発見例の大半もハンターが占めている。

その日から、僕はひたすら体を鍛えた、元々、運動が苦手で本ばかりを読んでいた僕だったがハンターになる為の年齢、十五歳となり体もかなり強くなった……背は小さいままだけど……。

「……よし」

ハンターランク取得試験。その試験日である今日、僕はハンターになる為の一歩を踏み出す。必死に溜めたなけなしのお金で買った剣は片手剣のハンターナイフと呼ばれる小さな物ではあったが、それでも手に持てばそれがモンスターを殺す為の武器だという事が判った。

村長から借りていた家の扉を開けた僕は眩しい朝日に照らされながらも一歩一歩踏み出していく、この村に存在するハンターの集いの場である酒場へと。

「お、ラセ君ーっ！」

そんな中で、僕の名前が呼ばれる。声の方向に立っていたのは一人の女性だ、この村の中では一番僕と一緒にいた時間が長かったハンターであり、僕の命の恩人でもあるハンター。

そして、ある意味、僕の師匠と言っても可笑しくはないかもしれ

ない、体作りやハンターの基礎知識などを色々と教えてくれた人だからだ。

「リーザ、可笑しく無いか？」

彼女に向かって僕は自分の服装を見せる。防具は身につけずローブを纏っているが、それはお金が無かったので仕方ない、唯一買えた剣と盾のうち、盾は置いてきたから実質は剣だけだ。

「全然可笑しくないよっ！　マジかわゆすで最高だわ！」

……この人から教わったのは間違いだったかも知れないと何度か思った事がある、その理由はとても簡単だった。

「ふふ、それにしても三年経ってもミニミニなまんまだねー、まぁ、私はそれが超大歓迎なんだけどね？」

性格破綻者ではないが、特殊な性癖を持っていたりするので、世間体ではショタコンと呼ばれているものであり、小さな男の子をこよなく愛するらしい。

その事を知った時は数日、リーザから離れて過ごしたりもしたが、駄々をこねられて泣かれてしまい、色々と散々な眼にあった事はまだ記憶の中では新しい、そして、その後の出来事で僕は思った事もある。

リーザを慰めた後、初めてここに連れて来られた時に、ハンターの一人が僕の事を糞餓鬼と言い出て行けと罵ったのだ、別段、僕としても早く出たかったが繋がるリーザの手のせいで出る事は叶わず小さくため息を付いたのだが……。

リーザが突然、僕の手を離し、男に近寄ったと思ったら……右手の拳を大きく振るい放ったのだ、ゴキリと言う不吉な音を轟かせながら吹っ飛んだ男はすぐにリーザに、掴みかかろうとしたが……。

『あぁん？！　こんなラセ君の何処が糞餓鬼だぁ？　ハッ！　お前みたいな腑抜け者のハンターなんかよりも数千倍、いや、比べるなんておこがましいぐらいに最高に可愛いラセ君にそんな言葉を履いた事、後悔させてあげるわっ！」

その後の事は良く覚えていない、真後ろから受付人の女性が僕の眼を手で隠してくれたからだ。

まぁ、打撃音と悲鳴というＢＧＭが数分間に渡って響き続けていたが、ともかく、その件から僕は彼女は怒らすまいと誓ったのだった。

「ラセ坊もついにハンターか、頑張れよー！」

「まだ、正式にハンターになったわけじゃないですよ」

「鉄槌のリーザの教え子なんだ、絶対に受かるだろーよー」

あのリーザがブチ切れた後もちょくちょくとここに来る事になった僕は此処の人達とはかなり顔見知りとなり、今ではこんな風に言葉をかけられる風になっていた。

懐かしいなぁ……初めの頃は会話さえも交わさなかったのに、少しづつ少しづづ打ち解けていったのだ、ちなみに鉄槌のリーザとはハンマー使いであり、この村でもトップランクのハンターであるリ

ーザの異名でもある。本人と嫌がっている様だけどその二つ名はその通りだといつも思っている。

普段は気さくで優しそうな綺麗な女性であるが、切れたあれを見た後にはその異名が正しいとしか思えない。

「ルナさん、ハンターランク取得試験を受けます」

そして、僕は一人、受付人の前へと進み、言葉をかけていた、この人はリーザが切れた時に僕に目隠しをしてくれた人である。

若いながらも元ハンターでもあるらしく、極稀にここで騒いでるハンターを沈黙させてる所も見た事がある、その時の顔は般若の様でかなり恐ろしかった。。

「本当に受けるの？　別にもう少し先でもいいでしょう？」

「受けます。ハンターにならないと僕の探し物は見つかりません」

ハンターになる事はまだ目標の一歩でしかないんだ、あれを見つけるのどれぐらいの時間がかかるのか判らない以上、少しでも早く探しに出たいのだ。

ルナさんは僕の言葉を聞いて、数分考えた後に、頷きそのまま微笑んでくれた。そして一枚の紙が渡される。

「ハンター登録試験を受ける為の証明書みたいな者、死んでも此方側は責任をとりませんって感じのね」

「死なないから書く必要なんてないと思うけど……」

死ぬ気なんて更々無い、それに仮に死んだとしても僕には家族も誰も――いや、死んだ後なんて事は考えない方がいいか。紙に自分の名前を書いた後、自分の指の先を少し噛み千切り、血印を付ける。

「確かに……内容は森林にてランポス四体の討伐です、無理は駄目ですよ？」

「判っています」

そして、僕はリーザとハンター達の方向を向くと、皆が応援するかの様に笑ってくれていた、そこで少しだけ心が温かい気持ちになって来るが、応援を無碍（むげ）にしない為にも僕は、森林と脚を進め始めるのだった。

やっと進む事が出来る、そう心の中で感じながら……。

ハンターランク取得試験！』

体が重い……。脚が思う様に動かず、また立ち止まってしまう……。

「はぁ……はぁ……」

体力をつける溜めに走り込みや、リーザから武器を借りて剣の特訓など色々な事をして来た。これだけ鍛えたのだから簡単にクリアできると高をくくっていた。

だが、結果はこの有様だ、ローブは一部分が千切れ皮膚が露になっており、唯一の武器であるハンターナイフも刃がボロボロになり始めている。そして、重いこれを投げ捨ててしまいたいとも考えていた。

ただ走るだけなら問題無かった、言い訳となるがその通りなのだ、森林地帯は名の通り森林、足場は不安定で草だらけの為に走りづらく、この永遠と続く蒸し暑さのせいで動かないでも体力が奪われていく。

「負けられない……のにな……」

ハンターになる事なんてただの第一目標なのに、それだけで挫折しようとしている自分が情けなく思う、だけど諦めるわけにはいかない……、散々準備してきたバックの中から一つ、緑色の液体、回復剤と呼ばれる物を取り出し口の中に流し込んだ。

甘ったるい味が口の中に広がっていき喉を乾きを潤してくれる。

そして、ほんのりと疲れきった体に染み渡り動きを阻害していた疲れを奪い去ってくれた。

「一先ずは……ここに入って休むか」

僕が見上げた先にあるのは大きな横穴だ、風の通りも良さそうだし涼しそうだ。時間はまだ沢山ある、今は少しでも体を休ませて体力を回復させるべきだ。

そして、休むついでに考えないといけない事もある……ランポスは一匹も殺す事が出来なかった、いや、本来なら簡単に殺す事が出来たのに、殺せなかった。

ちゃんと決断しないといけない、今ここにいる僕は一人だけなのだ、リーザの様に優しく手を差し伸べてくれる人なんてここには誰もいないのだから……。

モンスターハンター　赤き翼

『ハンターランク取得試験！』

初めての狩りという事もあったせいか、若干緊張していた僕は手が少しだけ汗で滲んでいる事に気づいた。今からこれでは始まった時に剣を滑り落としてしまうかもな、なんて事を考えながら強く握

りなおす。

出来る事はやってきたから、きっと大丈夫、ランポスは武器もなしにかかれば危ない相手ではあるが、武器は持っているし、何よりも普通の人以上の訓練をしてきた。

「リーザも心配し過ぎだな、本当に……」

鍛えている時にリーザからいつも言われ続けていた言葉がある、それは躊躇うなと言う事である。武器は迷いがあれば鈍り、刃も通さなくなってしまうと、そんな事は分かりきっている。一度戦いが始まってしまえば何もしなければ殺されてしまうんだ、躊躇う必要なんてどこにもない。

だけど何か嫌な予感が先ほどからし続けている。背を振るわせる様なそんな悪寒がいつまでも続いているのだ。

「グギャア！　グギャア！」

そして、何処からともなく響き渡る甲高い叫びに僕は即座に近くの木の後ろに隠れ声の聞こえた方向に眼をやる――そこにいたのは青い鱗を持つ小型の恐竜の様な生き物、ランポスだ。

群れで行動すると本には書かれていた為に数匹と同時に戦う事になるだろうと予想していたが、一匹なら好都合だ。すぐに対象を確認した僕は木の陰から跳び出て一直線に駆ける。

敵に目視されづらい様にとなるべく体を低くして駆ける、普段から背が小さいからこういう時にはばれ辛くて役立つというものだ。

「やっぱり鈍くて弱いな……」

認識通りと思いつつ、木に隠れてから見失っていた様だったランポスはやっと僕の姿に気づいたが、その間に僕は既に高く飛び上がり剣を振り下ろしている、このタイミングなら避け様がない、そうして放った一撃は易々とランポスの片腕を切り落とす。

「――――ッ！！」

どんな事を言ってるのかも判らない悲鳴を放ち耳がキーンとして痛くなるが、その怯んだ所に更に切り上げと横薙ぎを放ち、ランポスの身に大きな傷を作ってゆく。そして、やっとランポスが反撃に出ようとした瞬間、小柄な体型と俊敏な速度を生かして一気に後ろに下がり距離を取った。

怖くもなんともない、あるのは臨場感に当てられて出た興奮と自分の力で敵を倒す事が出来るという確信による余裕だ。

そして、ランポスも鈍く動き出す、脚に力を入れて大きく跳び上がり僕に鋭い爪を放つ、だけどそんな本にも書かれている当たり前の行動であり、少しだけ跳ぶ高さには驚いたもののなんら恐怖感も無く少しだけ横に移動するだけでランポスの攻撃はずれ、僕に当たる事はなかった。

着地して動きが止まっている所に僕は叩きつける様に剣を振るう。既に瀕死であるランポスには堪らない一撃であったのか、そのまま地面に倒れ、必死に立とうともがく……。

「……呆気ないな、本当に呆気ない」

剣を逆手に持ちランポスの頭に向け振り下ろそうとする、その間もランポスは必死にもがき、僕を射殺す様な眼で睨みつけている。さっさと殺してしまおう……そう、手に力を入れて。

力を……入れて……。

「こんなに簡単に倒せるんだ……わざわざ殺さなくても鱗だけを……」

倒した証としてランポスの青い鱗を剥ぎ取ればそれでいいんだ、わざわざ命を奪う必要なんてない、だけど、本当にそれでいいのだろうか、リーザの言った言葉、躊躇うなという言葉で思い出される。

躊躇っちゃいけない、いけないんだ、生かして置けば障害になりゆる可能性も……だけどこんなあっさりと倒せるこんなランポスがどんな障害になり得ると言うのか……。

「グギャアア！　グギャアァア！」

悲鳴をあげているランポスを身ながら思う、振り下ろせばいいんだ、ただこの剣を……。そして、一気にやろうと瞳を閉じて神経を集中させながら剣に力を込め直し――。

「っっ！　かはっ！」

激痛が体を駆け回るっっ！　そのまま何かで吹き飛ばされたのか、体を地面に打ちつけながらも訓練で覚えた通りに足をブレーキ代わりにして倒れない様にするも、喉奥からこみ上げてくる吐き気に耐えられずその場で吐き出してしまう。

痛……い……、耐えられない程で無くても叫んで転び回りたい程の痛みだ、すぐさま先ほど自分の立っていた場所を見れば、そこにはもう一匹の青いランポスが射殺す様な形相で僕を睨みつけられている。

そこで気づいた、先ほどのランポスの叫びは悲鳴じゃなく、仲間を呼んでいたと言う事を……よくよく周りを探れば目の前の一体の他に数匹分の殺意が感じられる。

『躊躇えばその代償は命で払う事になるのかも知れないの、だから絶対に躊躇っちゃダメだよラセ君』

そして、数箇所からの駆け出してくる音が聞こえすぐに目の前に転がり込む。

「ぐ……ぅ……」

脇腹の痛みが奔るも気にしてなどいられない、真後ろの靡(なび)いていたローブが爪で切り裂かれたのを見て立ち上がりの後にカウンターの様に一閃、剣を横薙ぎで放つ。

回転の加わっている大きな一撃は真後ろから襲ってきたランポスの爪を砕き後ろに吹き飛ばすが、その振るった一瞬の隙を他のランポスが襲いかかろうとしてくる。

剣が二つあればと思いつつ、片方を剣で流し、流した後の剣でもう一撃を防ぐ。そして後ろの一撃は体を大きく捻り避けようとするもローブを切り裂かれ肌が若干、露(あらわ)になってしまう。

「抑えきれない、くそっ！」

僕は痛みを堪え懐から黄色い玉を取り出し、地面に叩き付けた。眩い閃光が辺りを一瞬で照らしているのが目蓋の上からでもはっきり判った。

先ほど、横からの猛烈な突撃で僕は転がされて吐いた。はっきり言って生き残れた事が奇跡に思える。脇腹の骨が折れる事は無かった、大きな痣となっているのが判るがそれだけだ。もしこれが体当たりではなく、爪や噛み付きだったらと思うとゾッとする。

そして、悔しい……あれだけ散々言われ続けてきた、躊躇うなという言葉、僕は結局、躊躇ってしまった。

その結果がこれだ、武器はボロボロになり、体当たり以外の攻撃でローブも千切られている。

「代償は……命か……」

一先ず今は逃げるしかない、少しでも遠くへ、遠くへ……と。

そうしてやっと見つけられたこの場所で僕は、一歩一歩とゆっくり歩き、何も、誰も居ない洞窟の中で一人倒れた。

血が流れる事は無かったが、精神的な疲労と肉体の疲労が酷い……剣もこの状態では何も切る事は叶わないだろう。

「リーザが危惧していた理由をやっと理解した……、僕はまだまだ弱かったのに傲慢だな……」

こんな奴など恐怖にならない障害にならない、そんな馬鹿な考え

で自分の命を奪われかけた。それを改めて確認して僕は恐怖で涙が零れ落ちる。

だけど……こんな所で諦めるわけには出来ないんだ、皆の応援を今までの苦労を……やっと初めてのスタートラインに立てたんだ、あの忌まわしき龍を探すの為の一歩を進めたんだ。

「迷う事はもうしない、もう奪われるのは沢山だ……」

今日は一人だった、だけど、もし仲間が出来ていたらこの迷いで誰かを殺していたかも知れない、そう考えると思い浮かぶのが失ったあの村の事だ……だからもう迷わない――。

だけど、今は……少しだけ……休憩を……し……よう。

「……」

戦場での一瞬の休憩、そう思い瞳を閉じた……。

『青の狩人、決意の剣』

後からどうしてこんな所で寝ていたんだと自己嫌悪に襲われつつ、ボロボロになった剣を研いで最初の切れ味を取り戻す。

洞窟にはモンスターが来なかったのは本当に安心した、寝ている間に食われて死ぬなんて間抜けな事は絶対にしたくはない。

それと、防具の重要性も改めて気づかされたと言った所か……、敵は一匹ではないので、一匹なら簡単に避けて戦う事が出来ようとも複数に襲われれば回避出来なくる場合も多い。

「今度からはもう少し考えて行動するか……」

後は片手剣の特徴である盾を持って来なかった事にもかなり後悔していた。腕力が少ない分、盾は邪魔にしかならないだろうと思っていたのだが、先の戦いで一発だけ剣で防いでしまった。その結果がボロボロの剣である。

剣のみで戦うとなれば相手の攻撃を全て流す必要がある。真っ向面から抑えるなんて事をしたら武器もそうだが僕の腕も持たなくなるだろう。

体が出来上がって間もない事もあり、まだ体は脆い。これが成人ならば真っ向から受け止めても余裕なのだろうが、成人になるまで待つなんて事はしたくはない。

やはり技術で補うしかないか……その結論に至った時には、体の

疲れも取れ随分は回復する事が出来ていた。

「さてと……リベンジ戦だ、覚悟は決めた――」

再認識……と言うのは少し可笑しいが、もう迷わない。目標の為にも相手に対して一斉の手加減はしない。

逆に一瞬で殺し痛みを長くさせない様にしてやろう、それが今の僕が出来る殺し合いの中での最大の慈悲だ。

剣を振りぬき、振るう、振るう、振るう。

迷わない、迷う事は自分を殺す事、そう認識したからこそ、もう殺し合いで思考は止めない。

常に考え、常に行動し、一切の加減をせずにその命を奪う。その意思を込めて放った刃は何よりも鋭く、素早く、全ての物を切り裂ける様にと願う――。

モンスターハンター　赤き翼

『青の狩人、決意の剣』

洞窟から出た瞬間、照りつける日光によりローブによって隠されていない肌が少しだけ痛く感じる。

だが、その痛みは僕の集中の切欠になってくれていた、風と草の音を遮断し、それ意外の音に耳を傾けていく。

その状態のまま少しずつ前に進んで行き、足を止めた。その場所は先ほど自分がランポスと殺しあっていた場所だ、そして先にいたのは僕が瀕死にしたランポスだ、結局あれだけの傷を受けていたせいが既に死に絶えている事が遠目からでもはっきりと判る。

死骸となったランポスを眺めていると少しだけ悲しい気持ちになるがすぐにそれを振り切る、既にここは戦場と化している、その証拠として――。

「グギャアアッッ！！」

真横から跳びかかるランポスに対して僕は軽いステップで後ろに下がりそのままランポスに向けて跳び上がる。ランポスは驚いた表情を見せながらもその爪で引き裂こうとするも、僕の剣は鋭い爪を流しそのままランポスの首に当たる。

「ここはもう戦場だ――」

腕に最大限の力を入れ振り抜く、下からの重みと跳びあがった重みが重なった一撃は本来切り落とす事の出来ないランポスの首を一瞬で切断し、その命を奪う――。

こんなにも簡単に死んでしまうのだ、ランポスも、そして僕も同じ様に首を切れればそれで死んでしまう。

地面に落下したランポスの体は土を抉りながら倒れ停止する。着地しながらそれを後ろ眼に見ながらも自分を殺そうとする殺意を持

つほかの奴らの位置を確認していく。

残りは三匹、と言う事は僕が逃げてからここで待ち伏せでもしていたのだろう、その狡猾な考えも生きる為に覚えたのだと思いつつ、どうやって殺すかを考える。

「一匹一匹仕留めるのが最善だな」

仲間を殺された為なのか先ほどよりも鋭い殺意で見てくるランポスの一匹に僕は洞窟で拾った小さな石を投げつける。投擲技術は少しだけ自信があり、ランポスから見ない角度で投げたその石は一直線にランポスの眼へと向かい突き刺さる。

不意撃ちともいえる攻撃に反応する事が出来なかったランポスは大きく体を仰け反らせるが、その瞬間に僕は駆け出していた。

最短ルートである直線ラインを駆け抜け、痛みを堪えるランポスの胴体に片手剣を突き放ち致命的なダメージを与える。

手に広がる嫌な感触に剣を放したくなるが、それを我慢しつ、突き刺した状態の片手剣を両手で持ち全力でそのまま振りぬく――。

「安らかに眠れ」

そう言葉をかけて地面に倒れ必死にもがくランポスの頭に無慈悲な一撃を放ち、沈黙させた。

「残りは二匹か……迷う事を無くした僕を殺せるか？」

言葉は通じる事が無いのは判っているがどうしても問いかけたく

なった、先ほどとは違う余裕を感じているからかも知れない。

そして、その言葉を理解したかの様に二匹の青い狩人は僕に向かって疾走した――。

☆

「本当に一人で行かせてよかったのですか？　リーザも付いて行きたかったのでしょう？」

ハンターの集いの場所でも酒場としても機能しているこの場所で私は目の前に飲んだくれにそう尋ねました。

ハンターランク取得試験というのは本当は名ばかりのものでもあります、その理由としてあげられるのが他のハンター組んでその試験を受ける事が認められているからです。

ですから、普通なら友人、や師匠といった方と組んで簡単にクリアしてしまうのがほとんどの為、あんまり意味がないのです。

「う～、私だって付いて行きたかったわ～！　だけどね、こればっかりはラセ君が一人でクリアしないといけないの！」

既にビールも四杯目となり顔がかなり紅色に染まっているリーザを見つつ小さなため息をついた。

普段はあんなに甘やかしていてちゃんとした所はこうしてるから良い師匠であるのは判っている、だけど私に絡むのはどうにかしてほしいなと思っていた。

「最初ね……ラセ君を見つけた時に気になった事があったのよ」

「気になった事……？」

確かラセ君はリーザがリオレイアの討伐に向かった時に道中で見つけたはずですね、体中が焼き爛れ、其れでいて傷跡が何もないというかなり可笑しな状況で見つかったラセ君、しかもその周りも火で燃えた様な痕は何もなかったという不思議具合です。

近場の探索もしましたが、同じく火で焦げた痕も見つかりませんでした、その後、リーザと村長が保護人となり今は小さな家に住んで、いつもリーザと一緒に修行をしていましたね。

初めてあった時は、リーザがついに子供に手を出したか……と絶望的な事を考えてしまいましたが、手は出してないと知った時は何度よかったと思った事か……。

「なんか……変な事考えてないルナ？」

「いえいえ、それで話の続きを」

洞察力も中々侮れない所は流石ですね、これで男の子好きで無ければかなり凄いと尊敬できる人なのですが、残念でなりません。

「ルナにも言って無かったんだけどね、その時にラセ君の隣に真っ白な剣が刺さってたのよ、あんな剣初めて見たわ」

「真っ白な……剣ですか？」

確かに不思議ですね、武器は大抵、モンスターから剥ぎ取った素材で作るか鉱石で作るかの二択になります、だからこそ、そんな白い鉱石もモンスターも発見された事が無いので不思議に思えるのです。

「そ、鍛冶屋の爺様に聞いてもどんな素材で出来てるのか想像もつかないみたいでね」

「爺様でも判らない武器ですか、それでその武器はいまどこに？」

爺様は村一番と鍛冶師であり、元々はドンドルマでも有名人だったそうです、古龍の武器なども詳しく知り尽くしている爺様でも知らないとなればこの世界でも誰も知らない素材で出来ている可能性もあります。

「……」

リーザはなぜかわざとらしく顔を背け、焦る様に……ま、まさか？

「リーザ、はっきり答えてくださいね？　もしかして無くしたのですか？」

その武器がラセ君の近くにあった事からもしかしたら身元が判る物だったかも知れないのに、それを無くしたとあれば……それはかなり問題な事です。

「えー、ぇーと」

「無くしたんですね……」

呆れた……ですけど、無くしたと言えどこの小さな村ですからすぐに見つかると思いますが、そんな事を考えていると新しい来客がきたのか他のハンター達が少しざわつき、其方の方向に眼を向けると。

「ルナさん、依頼はこれでクリアだな？」

ボロボロのローブを身に纏ったラセ君がやんわりとした笑みを向けてそこに立っていました。その笑顔は行く時よりも若干、男らしく見えたのはきっと間違いではないでしょう。

『短き休息』

体中が悲鳴をあげて仕方ない……これはきっと代償なんだと思う……。

と少しだけ意味ありげに言ったものの、本当はただの全身筋肉痛だったりした。

だけど、それはある意味当然と言える、普段から鍛えているといえど、初めてのモンスターとの狩りで肉体的にも精神的にも酷く酷使した上に、長時間に渡ってあの森林を歩いていたので、むしろこれで筋肉痛にならなかったらそれは本当に僕なのだろうかと疑ってしまうかも知れない。

僕はあの後、ランポス二頭を殺し、五匹の鱗を剥ぎ取り村へと帰還した、酒場代わりにもなっている集会所に向かって入って見れば、焦り顔のリーザと呆れ顔のルナさんがいてここは何時も通りだなと少し微笑ましく思ってしまう程だった。

「せめて、手だけでも動ければ……っ」

ぐぎぎっという音が響きそうな感じに腕を動かそうとするが、結局動く事は無く、この退屈な時間をどうやって過そうと考えていた……。

手が……手が動けば色々と出来た、本を読んで暇な時間を過したり、両手を合わせ精神統一なども出来ていたかも知れない、だが、全身筋肉痛は僕の指の動きさえも邪魔してくれる。

「はぁ、せめて会話の相手がほしい」

切実な願いであると共に、少しだけ愚痴を聞いて貰いたくなった、主にこういう時は頼りになるルナさんとかがベストだ、真逆に一番駄目な愚痴相手はリーザである、きっと僕の愚痴を役目を放棄してリーザの愚痴講座が始まりそうだ。

顔だけを少しだけずらして窓の外の蒼い空を眺める。空はどこまでも広大で広い、なんて珍しく変な事を考えてしまったが、その通りなのだろう、そして、僕はこんな空と同じぐらい広い世界から見つけなくてはいけないんだ……と、これからの苦難を考え、小さく一度、ため息をついた。

ここは村の隅にある小さな家、一部屋しかなく、小さな本棚とアイテム箱が一つ、そして今僕が寝ているベッドがポツンと置かれている寂しい部屋だ。

そして、うとうととしてきた時、意識が途切れる瞬間にこう思った……リーザの奴、暴走してないかな、と。

モンスターハンター　赤き翼

『短き休息』

「ねぇ、ラセはどうしてハンターなんて目指しているの？　別にこの村でゆっくり暮らしてればいいじゃない」

……いつだっただろうか、そんな言葉をかけてくれた少女を思い出す。印象的だった蒼いロングの髪、綺麗だなと良く眺めていた気がする。

「……探し物があるんだ、絶対僕が見つけないといけない」

この記憶は、リーザに助けられた後、やっと火傷が治って体を鍛えると決めた時だっただろうか、近くに来ていた商人の娘と同い年と言う事もあり、リーザに呼ばれて会いにいき、友人になって少し経った時だと思う。

「大切な物なの？　ハンターなんて危ない者になってまで探さないといけない」

心配そうな瞳で僕を眺める彼女に対して、僕ははっきりといった「そうだ」と……あの時から僕の意思は変わっていない。今も探さないといけないと思っている。

なんで探す必要があるのか……そう尋ねられたら即座に答える事は出来ないと思う、だけど探したいんだ。僕の幸せを、仲間を奪ったあれの事を……。

「なら、私も手伝うわ！　一人で探すよか、二人で探した方がすぐ見つかるからね！」

「必要ない」

むしろ、せっかく友人になった彼女にハンターなんてやらせたくないという気持ちが強かったと思う、もう大切な人を失いたくという気持ちが渦巻いていて、反射的に悪い言い方で返してしまった。

「ふーんだ、ラセが何言ったって私もハンターになって手伝うんだから待ってなさいよ！」

ただの口約束、というか一方的な約束をして、彼女はその後、商人達と共に村から出て行った。その後の消息は僕は知らない。

例え知ったとしても、何かが変わるわけでもないだろうな……と心の中で思いながら、更に奥深く夢の中へと意識が落ちていった。

☆

村の入り口で一人立ち往生する少女は、ニンマリと口を三日月型に変えて行く。蒼く長いツインテールの髪であり、その背中には似合わない大きな盾と槍を支えられている。

まだ幼さの残る顔立ちでありながらも、瞳には強い意志を持つそんな少女は一直線に村の集会所へと足を進めていた。

距離がそれ程無い為かすぐに目の前にまで移動した少女は、ドアに手をかけて一気に開く――。

「ルナさん！　ここの住民表とハンター名簿に追加お願い！　名前はサラ・ステーシーでランス使い！」

怒鳴るかの様な声が集会所に響き渡り、周りが唖然としている中で二人だけ動く人影があった、片方は先ほど名前を呼ばれているこの集会所の受付人を担当するルナであり、もう片方はルナの昔ながらの親友でもあり、高ランクのハンターでもあるリーザだ。

「な、なんでアンタが此処にいるのよ！　むしろなんでここに戻ってきた！」

「ふん、別に貴方には関係ないでしょ、あ、ルナさんジュース一つお願いねー」

ジュースを注文しながら席に着いたサラはそのまま、両腕を広げ伸びの格好をする。長旅をしてきたのか片手に大きなバックを持っていて、明らか常人では持てない量なのが見て判る。

「サラちゃん、背伸びたのですね？　髪もストレートはやめたのですか？」

ルナさんは気さくに話しかけながらサラの前にジュースをトンッと置く、周りのハンターは新参者を調べる様な目線で見ているが、唯一このルナとリーザだけが違う反応を見せていた。

サラは元々商人の家であり、昔、商売でここに連れられて来たのだ、その時に知り合いになった人物が三人いる。その二人がリーザとルナである。

「うんー、今は後ろで纏めてツインテールにしてるの、どう？　似

合ってるかな？」

「じゃじゃ馬娘には丁度いいじゃないのー？」

横から茶化す様に割り込みながら席に着いたリーザは嫌味ったらしくそんな言葉を放つが、サラはそれを簡単に聞き流していた。

「後、サラちゃん、住民登録は構いませんが、住む家はどうするんですか？」

今、この村には住める家がない、本来はハンター用に空き家があるのだが、この村にはリーザの他にも数人のハンターが暮らしている為にもう余っている家が無いのだ、唯一余っていた家はラセが使っていたりする。

「うん、ラセはハンターになってるんでしょ？　なら、私はラセと同じ家に住むー」

「判りました、登録しておきますね」

なんとも簡単に会話が流れてしまったが、実はそんな簡単な事ではなかったりする、同じ家にハンターが住まうという事は、安全面が少しだけ危なくなるのだ、故にハンター同士で話し合ってから登録が為されるのだが、ルナはラセとサラの関係を知っているので別に問題ないと考えたらしい。

だけど、それを大きく反発する人間が一人する。ラセの師匠でもあり、姉の様な立場にいるリーザだった。

荒々しい殺意と怒気をサラにぶつけながら大声で喚き始める。

「駄目っ！　ぜっっったい駄目ぇ！！　ルナも簡単に承諾しちゃ駄目でしょ？！　ラセ君にちゃんと話を聞いてからじゃないと、ラセ君だってきっと嫌なはずだよ！」

実はリーザは少し前にサラとまったく同じ事をしようとしたのだが、その際、ラセ君はリーザのショタコン疑惑を聞き、即答で断っていた、ちなみにそのショタコン疑惑を流したのはサラだったりする。

「大丈夫、ラセなら許してくれるわよ、それじゃ、ラセの家もとい新しい私の家を下見してくるわ」

正に嵐の如く、掴みかかるリーザの手を巧みに避けながら集会所から出て行くサラを見たハンターは心の中で皆同じ事を考えていた。

また、ラセ坊が苦労するだろうなぁ……という事だが言うまでもない。

そして、彼女の出会った友人の最後の一人が、ラセである。小さき頃の約束を彼女は心の中でいつまでも思い続けハンターになったなど、誰も判る事はなかった。

後で集会所には大暴れるハンマー使いがいたそうだが、すぐに最強とも言える受付人に沈黙させられたという、奇妙な所でラセが心配していた事は起こっていたりするのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1593q/

モンスターハンター　赤き翼

2011年1月16日03時11分発行